

談話室

カウンセラー

諸富 祥彦 さん



profile

福岡県生まれ。1992年筑波大学大学院博士課程終了。現在、明治大学文学部助教授。教育学博士。

臨床心理士、日本カウンセリング学会認定カウンセラー、上級教育カウンセラー、学校心理士の資格を持つ。

著書に「人生に意味はあるか」（講談社）などがある。

教師を支える会代表。http://morotomi.net/

——算数・数学の思い出は？

中学校まではとても得意でしたが、高校以降は苦手科目という意識しかないですね。心理学でも統計などを使う先生がいますが、僕はできるだけ避けて、哲学的な方法をとっているんです（笑）。

中学時代に「マッハ」というあだ名の数学の先生がいました。この先生は子どもがわかるように思いを込めて教えてくれましたので、その授業には、苦手なりに生徒がみんな一生懸命に食らいついていったという思い出がありますね。

大学入試では二次試験に数学がありました。でも、僕は一問も答を書くことができなかったんです。合格できたのが今でも不思議で……。数学と英語とどっちが得意か、というのはよくある質問ですよ。大学生のときある先生が、英語は「論理」で数学は「直感」だと言っていました。本当にそうだと思います。僕は論理的に一步一步考えるのは得意なのですが、数学は一步一步じゃ間に合いませんよね。だから、こうなってあんなってと、論理で考えて一生懸命やったから、大学入試でも部分点をくれたと思うんですよ。最後までいかなかったですけど（笑）。

——心理学の道を進まれたのは？

僕自身、高校生のときにとっても悩んでいたからです。そこから抜けられないので、しかたないからこれと一緒に生きていこうという感じです。進路選択というよりも、まず自分のために始めたこ

とが、今の職業に自然につながっていったんです。

——数学の先生方の印象は？

講演などで高校にはよく行きます。そこでいろんな先生とお会いする機会がありますが、数学の先生には、真面目な方が多いような気がしますね。

数学って美しいですよ。数学や音楽は、完成された美を求める非常に美しい学問だと思います。ただ、不登校や非行少年といった、人生という答のない問題で悩んでいる子どもたちもいます。答を出す過程の「もたもた」に、もう少しつきあってあげていただけたらうれしいです。

自分の経験からいっても、数学は、わからない子はとことんわからないんです。数学の先生には、わからない子どもの立場に立って考えることが特に必要とされるのではないのでしょうか。

——数学の先生方にメッセージを。

僕は「悩める教師を支える会」という会をやっています。先生方の悩み相談を受けています。高校の先生方全般にいえることですが、進学校から教育困難校に勤務校が変わったときに、その違いに戸惑ってしまう先生が多いようです。進学校から教育困難校への異動は、もうほとんど転職みたいな大きな変化なものですから。

僕は今は、「教師受難の時代」とであるといっていますが、生徒や保護者との人間関係など、教師を取り巻く環境がとても厳しい時代だと思います。したがって、高校の先生には教科の専門である以上に「人間関係のプロ」であっていただきたいと思います。

先生方をお願いしたいのは、いつも弱音や愚痴を聞いてもらう相手を探しておいてください、ということです。まじめで完全主義の先生は、自分で自分の仕事をきちんとこなす、人に迷惑をかけるという方が多いです。人に助けを求めたり、弱音を吐いたりすることは、自分が劣っているということだと短絡的に考えてしまう先生がいます。しかし、そうではなくて、弱音を吐くことができるというのは、一つの能力なんです。つまり、それはこの厳しい時代に教師として生き延びていくために必要な一つの「知恵」なのです。